まさか、と思った。
別人だ。そう思っても、しばらくは心臓が早鐘を打ち続けて止まらなかった。
少し似ているだけだ。顔と雰囲気が。
だって、あいつは。

――もうどこにも、いないんだから。

Bl@ckerでペスカ・コシカが有名になるまで、そんなに時間はかからなかった。
何故かって、参加してる連中のほとんどは半端な考えのやつばかりだったから。
そんな口では殺したいだのなんだの言ってるけど、実際にそんな勇気のあるやつなんていない。
そういうのを相手に本気でかかっていけば、面白いほどあっさりと尻尾を巻いて逃げ出す。
こいつら正気じゃねぇ、って。
正気がないわけじゃない。どっちかといえば遊んでた。――本気で。
そういうヤツらの怯えきった顔を見ると、ゾクゾクした。
一人じゃ何もできないヤツら。群れを作って自分を守って、それで強くなった気でいる。
そのひとりひとりを群れから引き剥がして、解体して、怯えさせてやるのが楽しかった。

所詮、お前らの絆なんてニセモノだから。嘘だから。
俺らだけは違うと思ってた。ペスカ・コシカだけは……絶対。

深夜。あと数時間で地平線に太陽が顔を出すという頃、今日も勝利の美酒に酔いしれてふざけ合いながら、リンは仲間たちとアジトへ帰還していた。
肩を組みながら冗談を飛ばす連中の、磨り減った拳にこびりついた夥しい量の血痕。服や顔にべっとりと張りつけている者もいる。
それでも皆、晴れ晴れしい顔で誇らしげに笑っていた。
今日の「報復」はまた一段と派手にやらかしたと思う。Bl@ster終了後に行う、敵対したチームへの文字通り「報復」だ。
やる時はいつでも本気で全力——それがモットーだった。罪悪感などない。あるのは達成感と優越感。

明日にはこのAREA:GHOSTに、そしてBl@ster中に噂が広まっているだろう。
自分たちの力を知らしめる為の踏み台がまたひとつ増えたのだから、喜ばしいことだった。
そして、恐ろしいまでの凶行を平然とやってのけるヘッド、通称コート……リンに対して、チームの人間は尊敬と畏怖の念を持って接していた。

アジトに戻ると、それぞれが好き勝手な時間を過ごし始める。
また酒を飲み出す者がいれば、座った途端にひっくり返っていびきを掻いている者もいる。
このアジトは地下に潜った作りになっていて、入るとすぐに殺風景なコンクリートの灰色に視界を埋め尽くされる。元は自動車整備か何かの作業場だったらしい。
一応、奥に小部屋もいくつかあったが、ほとんどはこの広間のような状態になっているスペースに屯していた。

そんな中、リンは寛ぐ仲間の前を通り過ぎて小部屋の方へ向かった。
リンとチームのナンバー2であるカズイは、奥の小部屋をひとつずつ使っている。
今は自室ではない方――隣の部屋の扉をノックもせずに押し開いた。
「……またやってきたのか」
すぐに飛んできた第一声は、あまり機嫌が良くなさそうだった。
けれど、だからといって顔色を窺うつもりはない。後ろめたいことをしたなんて思っていない。
リンは後ろ手に扉を閉めて、壁に凭れて腕組みをしているカズイへと視線を向けた。
「何か文句でも?」
軽く顎を上げて、少し挑発的に聞き返す。ふわりと生々しい鉄の匂いが漂った。体についた血臭だ。
カズイは「報復」には絶対に参加しない。ペスカ・コシカのナンバー2になっているくらいだから、腕は確かなものだった。
けれど、必要以上に力を振るおうとはしない。カズイにとって「報復」は、必要なものではないらしい。

ペスカ・コシカの基本は楽しむ事にある。楽しもうとしないものを無理に連れ出したところでどうにもならない。
だから放っていたが、本当は来てくれたらカタがつくまでの時間が短縮できるし、それにもっと楽しくなるだろう、などと思っていた。
カズイは表情を変える事なく、押し黙っている。
「……」
「なんだよ」
じっと見つめられて居心地が悪くなり、軽く睨みつけると、カズイは一度瞼を伏せてから低く落ち着いた声で呟いた。
「……もうやめろよ」
「何が?」
「わかってるだろ」
「なんで」

「やりすぎだ」
「やられたらやり返す。やると決めたら徹底的にやる。それが俺らのやり方だろ。じゃなきゃ舐められる」
「……」
リンが反抗意識剥き出しの言葉をぶつけると、カズイは小さく溜息をついて凭れていた壁から体を起こした。
怒りとも悲しみともつかぬ複雑な眼差しで、扉の前に立っているリンの側へと歩み寄る。
——殴られる。条件反射で身を強張らせたリンの頬に、ひやりとしたものがそっと触れた。
カズイの掌だった。
「……リンに、血は似合わない」
微かに呟くと、カズイはそのままリンの横をすり抜けて部屋を出ていった。
「……」

部屋の主がいなくなった後も、リンはその場に立ち尽くしていた。
カズイに触れられた頬が、内側からうっすらと熱を帯び始める。
その部分に無意識に指先を当てて、ざらりとした感触に気付く。
……血か。
乾いている。「報復」の時についたのだろう。
途端、カズイの言葉が頭の中を回り出して離れなくなった。
——リンに、血は似合わない。
「……、だったら、なんだってんだよ……」
突如として激しい苛立ちに駆られ、リンはきつく拳を握り締めた。
悔しさにも似ているこの感覚がなんなのか、自分でもわからなかった。
「報復」の後で少し興奮している。相手がカズイじゃなかったら、理由はどうあれ部屋を出ていく前に捕まえてぶちのめしていただろう。
けれど、静かに見つめるカズイの眼差しは決して責めるわけではなく、なのに何も言えなくなるような不思議な気迫があった。

部屋を出て、どこへ行ったのか。
……ひとつしかない。
そう思い至り、リンは後を追うべくカズイの部屋を出た。

カズイは高い場所で星を見るのが好きだった。晴れた日の夜は必ずと言っていいほど外に出て、空を見ていた。
ペスカ・コシカはその傍若無人な振舞いのせいで恨まれる事が多く、目くらましの意味も含めて複数のアジトを持っていた。
そのアジトのどれも、気付けば無意識に空が見えやすい場所の近くを選ぶようになっていた。
今は真上が小高い丘になっていて、中々見晴らしが良い。
草木が鬱蒼と茂った斜面を登っていくと思った通り、カズイはそこにいた。地べたに座り、じっと空を見上げている。

さっきの事があった手前、少し躊躇いつつ、リンはカズイに近付いて無言でその隣に座った。
カズイは何も言わず、リンの方も見ずに視線を空へと向けている。
けれど、その横顔に怒った様子はない。空に見入られていて目が離せない——そんな感じだった。
夜に慣れた目で、そっと窺う。
カズイの髪は一見黒だが、実は少し青みがかっている。
地味だから普段はわからない。他の連中もただの黒だと思っているだろう。
夜の月明かりに照らし出される一瞬だけ、幻想的に青が映えるのだ。
何故か日の光ではなく、月光で。
それがたまらなく綺麗で、密かに見とれていた。カズイの控えめだけど上品な顔立ちによく似合っている。
「俺はさ、リン」
横目に盗み見ていたら、突然カズイが口を開いた。心臓が痛いほど跳ね上がる。

「……何？」
悟られぬように慌てて視線を逸らしながら、リンは平静を装ってぶっきらぼうに返した。
そんな様子を気にかける風もなく、カズイは言葉を続けた。
「いつか、あの星のひとつに行ってみたい」
「……星？」
唐突な話題に驚きながら、思わず空を見上げた。
今日は朝方に雨が降ったせいか空気が澄んでいて、いくつもの星がくっきりと瞬いている。
「宇宙飛行士になりたいって事？」
「まあ、そんなとこかな」
「子供っぽい」
つい思ったことをそのまま口に出してしまった。
星に行ってみたいだなんて、ずいぶんなロマンチストじゃないか。

「……うるさいな」
カズイはほんの少しむっとしたようだった。……珍しいかも知れない。
「いいだろ、子供でもなんでも。ずっと前から夢だったんだ」
「ふぅん」
ムキになっているカズイを見るのが新鮮で、内心愉快なのを抑えながらリンは気のない返事をした。両膝を胸元へ手繰り寄せる。
子供っぽいなどと言いながらその実、少し羨ましいと感じていたりもした。
自分の夢はと考えると、それらしい願いが何ひとつ浮かばなかったからだ。
今はペスカ・コシカがあるからまだいい。けれどそれまでの夢といったら、ただひたすら——兄を超えること。兄に打ち勝つこと。それだけだった。
だから、大人っぽいカズイも普通の子供なのだと、当たり前のことを今更思った。
「……俺も連れてけよ」
不意に、そんな言葉が唇から零れ落ちた。
「え？」

カズイが驚いた顔で振り返る。無意識だっただけに、むしろリン自身が言った後で驚いていた。
「……なんでもない」
照れ臭さがこみ上げてきて、慌てて顔を背ける。すぐ後にカズイの小さな吐息が聞こえた。
笑った風でも呆れた風でもなかったが、状況的に癪に障って、憎まれ口のひとつでも叩いてやろうと思った矢先。
「いいよ。俺が行く時、一緒に行こう」
そう言って、カズイは悪戯っぽく笑った。
唖然とした。見事に毒気を抜かれてしまった。
「……聞こえてたなら聞き返すなよ、性格悪ィな」
照れ隠しでつっけんどんに呟くと、カズイは少し可笑しそうに笑って、すぐにまた夜空へと視線を向けた。
だからリンも、高鳴る鼓動が気付かれないようにと祈りながら、黙って空を見上げた。

それからしばらくはどちらも無言で、けれど穏やかな時間だった。
どこまでも果てしなく広がる空に埋めこまれた、宝石のような星と月。
昼間は日光に霞んで見えないくせに、空が暗くなるだけでどうしてこんなに綺麗なのかと思う。
派手に輝くものよりも、そっと寄り添うように煌く方がずっといい、などと考えを巡らせながら、リンは隣の青みがかった黒髪へと視線を向けた。
夜の星空と、月光に映えるカズイの髪。夜にしか見られないのだから、いつか写真に収めておこうと思った。
本人は気付いているのだろうか。自分に無頓着なところがあるから、多分知らないだろう。
いきなり見せて、驚かせてやるのもいいかも知れない。
そこで、ふとした疑問に思い当たった。

「……カズイは、オンナとかいないの」
問い掛けると、少し驚いた眼差しが向けられた。
「なんだよ突然」
「いや、結構他の奴らは色々やってっから。そういうの、どうなのかと思って」
もし親密な間柄の相手がいるなら、髪の事もすでに知らされているかも知れない。そう思うと、なんだか気に食わなかった。
「どうなのか、って……」
微かに苦笑を交えて、カズイは小さくかぶりを振った。
「お前たちを見てるのだけで手一杯だ。危なっかしいし」
「なんだよそれ、保護者気取りかよ。俺とひとつしか歳違わないくせに」
確かにカズイはチームの中で一目置かれていた。信頼されていた。
決して声を荒げて怒ったり、暴力で物を言わせるようなことはしなかった。
それでも統率力は自分以上にあるんじゃないかと思っていた。カリスマ性、とでも言うのだろうか。

カズイの意見に反対する者は、チーム内には誰一人としていなかった。
「お前こそ、どうなんだ」
「……え？」
まさか聞き返されるとは思っていなくて、リンはぽかりと口を開けた。
「俺は、……別に」
言い淀んだせいで、語尾が弱々しく濁ってしまった。顔に血が集まっていくのが判る。
静かな瞳が窺うようにリンを見つめている。
それが気恥ずかしくて、視線を逸らした。
……正直。
チームのことで手一杯だというカズイの答えを聞いた時、安堵を覚えていた。
何故かは判らないけれど。
……いや、わかってる。けれど、今はそれを認めたくなかった。
認めなくていい。
今のカズイとの関係が、何よりも心地良いと思えるから。

この気持ちを、なんと呼ぶのかなんてわからない。
ただ、これからもずっと、カズイと一緒にペスカ・コシカを引っ張っていければいいと思った。
時折暴走してしまう自分を止められるのは、カズイしかいない。
だから、ずっと自分を——自分たちを、見ていてほしい。

そう思っていた。

あの事件が、起こるまで。

一面の血の海。ペンキをぶちまけたのかと思うぐらい、濃厚な。
横たわり、浮かんでいるのは——。
何が起きたのかなんてわからなかった。
悪夢なら早く目が覚めて欲しい。心の底からそう願った。
その中に、見つけてしまった。
視界に捕えてしまった。
ずっと一緒に歩んでいきたいと、そう思っていた。
どこまでも、やっていける気がした。
二人で……
せっかく綺麗だった黒髪の青が、染まってしまって勿体無いよ。
赤に——

チームの仲間が駆けつけてきた時も、魂が抜け落ちてしまったかのように、リンはただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

リンが着いた時、まだ犯人はその場にいた。
しっかりと目に焼きついている。
忘れもしない、忘れたくても忘れられない、あの――。

結局、混乱のるつぼに陥った仲間たちを掻き分けて、リンは犯人の後を追った。
けれど、突如として乱れたチームの輪にできた綻びは思いのほか大きく、リンが戻ってきた時、不安に駆り立てられた仲間たちは予想だにしない結論に至っていた。
リン一人が助かり、怖くなって逃げ出したのだと。瀕死の仲間たちを見捨てて。
――あり得ない。絶対に。

そう思って話し合おうとしても、無駄だった。
不安を埋めるかのように結束した仲間たちと、そこにいなかった者との間には、瞬時にして「不信」という途方もなく強固な壁が立ち塞がっていた。
憎悪に満ちた針の視線が幾つも突き刺さる。
心の奥で何かが崩れていく音がした。

――ああ、ここにはもうないのだと思った。
また失ってしまった。
自分の居場所も赤く塗りつぶされてしまった。
縋る足場など、どこにもない。

カズイなら。
カズイなら、信じてくれただろうか。
俺がやってないって、信じてくれただろうか。

……無理だ。
だってカズイは。
俺のせいで、死んだんだから。

ちゃんと伝えておけば良かった。
今のままでいいなんて、無理をするんじゃなかった。
永遠に、一方的に好きなままなんて――
もう二度と叶わない想いなんて――

何よりも、苦しい。

たとえこの命と引き換えにしても、仇を取ろうと決めた。
何度も何度も、俺から大切なものを奪い取って踏みつけていった男。
あの男の痕跡を探して――探して、探して、探して。

そうして、リンはトシマへと向かった。
イグラに参加する為に。

あの男の息の根を、この手で止める為に。

END

（初出：咎狗の血 初回特典小冊子 収録／2005年2月25日）

「月下点」解説

咎狗の初回特典ラフ集用に書き下ろしたSSです。
今見るとぎこちないですね……。こちらもほとんど手直しはしていません。
ゲーム本編では出てこない、リンがBl@sterに参加していた時の話です。
会話のシーンに悩んで、何度も足したり引いたりしていた覚えがあります。
カズイの髪の色が月光の下だと綺麗云々の設定は、書いているうちにもくもくと思い浮かんできて追加したりしてました。
当時のリンはおそらくものすごく尖っていたし、荒れてもいて、でもそんなリンが唯一抱いていた友情以上恋人未満のような淡い恋心を書きたいと思ってました。
ゲーム本編ではニコニコと人の良い一面を覗かせてますが、当時は人と会話する時の言葉のコントロールもできなかっただろうし、殴ったり蹴ったりで大変な人間関係だったと思います。

（淵井 鏑）